

学校を飛び出して、
地元で活躍するオトナを取材しよう！

夢を探すコツは 自分と対話すること

画家・デザイナー
吉野マオさん



池田町に移住し、アーティストとして活躍をしている吉野マオさんに、ご自身の生き方についてなどを詳しくお伺いしました。

Q:マオさんはどのような活動をしていますか？

まず絵には、絵画としての絵と、パッケージで使われるような絵があります。届ける向こう側のことを考えたり、誰かとの関係性の中から生まれてくる感情を絵にしたりしています。パッケージに使われる絵は、例えば蜂蜜を食べた味のイメージを絵に変換する仕事です。感情を変換するから、いろいろなコーヒー屋さんからコーヒーを頂いて、それを飲んで絵に変換したりもします。変換した絵を見たときにも自分がちゃんと味わって絵にしているから、パッケージを見たときに、こういう味なのかなっていうのが絵を通して分かる機能を持っています。これはパッケージになったりデザインに落とし込まれたりしたときも、お店でぱっと見てくれた人に届きます。



以前制作した蜂蜜や今制作しているお菓子屋さんの箱とか、幼稚園のロゴマークもすごく社会に必要とされるような感じがあります。ただ展示するための絵を描くだけじゃなく、こういうお仕事がすごく増えています。

Q:池田町に来る前は東京でお仕事していると聞いたのですが、東京にいるときはどんな活動をしていましたか？

モノづくりが好きなので、モノづくりができる東京の大学に入りました。将来について、いろいろな道があったりいろいろな可能性があったので、すごく悩んでいました。

どちらかというと自分のために何かを作るといよりは、社会に何かを作りたい、アイデアを出したいっていうのがありました。

卒業するタイミングで私と同じ志を持つ、モノづくりが好きな仲間に出会ったんです。

そして大学卒業するときちょうどコロナの時期でした。すごい東京の駅が冷たい印象でした。だから私たちは駅だったり公共の場、多くの人、美術が好きじゃない人でも、美術を見て目に触れるきっかけを作りたいと考えました。

期間限定のイベントとして開催したら、すごく反響がありました。公共の場所で見られることによって、都心の中にながらも、人間の温かみというか人間の創造物を肌で実感できるそういう都市のあり方もいなくなって提案しました。

反響あったので、JRの人たちは喜んでくれて、それがどんな仕事になっていきました。私たちも仕事のもりでやった訳じゃなくて、ただどうにかしなきゃっていうただそれだけだったんですけど、案外人のためになりました。



【感想】

マオさんにインタビューをさせていただいて、たくさん学んだことありました。特に印象に残ったことが二つあります。一つ目は職業選択についてです。私は今まで名前のある職業の中から自分がやりたい職業を探そうとしていました。だから、自分がやってみたいことを広い視野で探して、見つけていきたいです。二つ目は、マオさんの経歴についてです。マオさんが学生時代に取り組まれた電車の中吊り広告を展示して、アートを少しでも多くの人の目に触れるきっかけを作り、お仕事に繋がったことです。

このお話を聞いて、自分の長所を活かして、今の現状をどうにかしなきゃいけないという気持ちになり、行動に移せる所に感動しました。だから私も、まず自分の長所を見つけて、磨き、将来は社会に貢献できるように頑張っていきたいです。

【取材・記事】一年 宮川望

そこから、いろいろな仕事に繋がって商業施設のデザインを作ったりしました。商業施設の人たちも一緒にやってくれないかみたいなことで、デザインしたりとかアートを取り入れたりして、それが仕事になりました。

どこにも就職したこともないし、自然とやってたことが仕事に繋がったっていうのは、「社会のために何かしなきゃ」って最初思っていたからかもしれないですね。それが大きくなって思います。

Q:自分がやりたいことを探すコツがあったら教えてください。

好きなものから、将来こういうことしてる自分とか見てみたいとか、身近な所から探すといいと思います。例えば、通り道で畑やっておじさんいいなって思ったらそういう自分を想像してみたりとかもいいと思います。知ってる職業に捉われてほしくないです。今の気持ちを書き表してみたりとか、ちょっとでも興



Q:マオさんはアーティストという生き方を選んだとき不安などありましたか？

なかったですけど、なんでだろうって思っています。まず、自分にできることがアートしかなくて、他にできることがない分、自信にもなりませんでした。絵が描ける自分っていうのが強みだったって、ちゃんと思うようにしました。

味あることがあったら調べてみたいとか、本当の自分が何を考えているのかとか、一人で知る時間とかがあるといいのかなって思います。

自分と対話をして、「自分が本当に自信が持てるもの」とか見つけられたからこそ不安がないっていうことです。本当に自分の声をどうやって聞けるのか、そこに限ると思います。自分がやりたくないことをやるくらいなら死んだ方がマシって思っています。それくらい強い気持ちを持っていたら不安とかないです。不安って多分気持ちが弱いからあがってくると思いますが。気持ちが強いと不安にならないと思います。私は不安になろうと思ったら不安になれる意志は持っています。誰も不安の意志は絶対持っているとあります。その不安を私はなかったことにしています。

Q:高校生へメッセージをお願いします。

いい大学に受かるのがゴールだと思っちゃう所はあると思うけど、本当は大学はゴールではなくて、その先どういう自分になりたいとかどういう生き方をしたいのかとかが、一番大事だと思っています。広い視野で見るために、ドーンと構えるっていう意味で軽い気持ちっていうことです。私も自分に言いたいんだけど、どうしようどうしようって考えると何も見えないです。そういう風にはなってほしくないから、後ろの方まで見えるようなドーンと構えた気持ちが、大

学校を飛び出して、
地元で活躍するオトナを取材しよう！

型に縛られずに 柔軟な考えで

画家・デザイナー
吉野マオさん



池田町に移住して柔軟な考えで自分と社会と対話しながらいろいろな方面でアーティストとして活躍している吉野マオさんにインタビューを行いました。

Q:なぜ池田町に移住したのですか？

東京は人しかいない社会のフィールドの上みたいなき感じでした。もっと広い世界で生きてるはずなのにと感じて、窮屈に感じました。それで、一旦離れてみて自然豊かな場所まで自分と向き合ってみて何か物作りをしたら新しい見方ができるって思ったんです。

そう思った三日後くらいに、検索してこの家を見つけて、ここに住もうって考えました。池田がどんな所かどんな立地なのかも知らずにただ間取りとかを見て、し字キッチンが作れそうだなって思って、すごい軽い気持ちで決めました。

引っ越すときに庭が欲しいというのがあって、実際池田町に住んでみて、野菜とかも近所の人に協力してもらいながら作っていて、朝とりたての野菜でご飯



を作っているのが幸せだなんて思います。

デザイナーとかアーティストって結構電気とかない所で育った人とかも多くて、野山を駆け巡ったのが原風景になってデザインを起こしてますって人が結構多くて、有名な建築家で田舎出身の人しか自分の事務所を採用しないって人もいるくらい子供の時に感じた原風景を信じている人もいて、いろんな世界に足を入れてみて、それぞれのよさがわかる気がします。だから今の時代だと二拠点生活をしている人も多いです。

Q:アートを表現するときに意識していることはありますか？

絵は絵でもいろんな絵があって、絵としての絵というもの、パッケージに使われるものとして描いている絵があります。私の描いている絵は、例えばハチミツを食べた味のイメージを絵に変換するような仕事です。感情を絵に変換することだから、実際に食べて、絵に変換します。自分がちゃんと味わって、それを絵にしているから、パッケージを見たときに、こういう味なのかなっていうのが絵を通してわかる。そういう機能も持っているんです。

これも絵の仕事の工夫って感じかな。手に取ってくれた人がどう感じるのかをイメージしたり、生まれる感情を絵にしたりして、パッケージとかのデザインに落とし込んだ時に、お店で見えてくれた人に想いが届くって嬉しいじゃないですか。多分この気持ちがパッケージにも乗ってきます。

Q:どんな学生でしたか？

大学は専門的に陶芸をやったんですけど、それとはまた別に、昔から友達や家族に作品のような手紙を書くっていうのをやってたんです。今の絵に通ずるんですけど、人のために何かを作ったり、人に対してたくさんあると思うけれど、大学や就職することがゴールじゃありません。その先に自分がどうありたいかっていうのを一番大事にしてほしいです。そしてドンと構えた気持ちや姿勢がホントに大事で、考え方にも影響するから意識してほしいと思います。何よりも自分を見てほしいなと思います。焦らずに可能性を見定められるように広い心と視野でいることを大切にしてください。



【感想】

インタビューを通してマオさんがアーティストとしてただデザインを描くのではなく、手にとってくる人をイメージしながら描いていて、人との繋がりを大切にしているんだと思いました。普段街中で見かけるデザインにも色々な思いが込められていて色々な視点から見ることもできるんだと思いました。

そして私たちはこれからたくさん決めるなければいけなくて、悩むこともあると思うけれど、何か一つのこと縛られて型にはまろうとするのではなく、自分が本当にやりたいと思った方向に進めるように、自分と向き合っていきたいと思いました。

て自分の気持ち沸き起こって、それを何か形にしたりっていうのが、本当に自分の生きがみたいなき感じ、それをやると自分の心が解放されるし、幸せな気持ちになります。

陶芸の研究室にいたけど、本当に自分がやりたいことは、そういうことだったのかなって思います。

人に何か気持ちを伝えるときに、言葉で伝えることが普通だと思うんですけど、それだけで伝えられない気持ちってあるじゃないですか。そういうものを、たとえば手紙を書くときに、言葉だけじゃ足りないから、挿絵を書いて、その挿絵の部分が、でっかくなって絵になる。絵に自分の気持ちが乗るんだっていう所が、アーティストになるきっかけだったと思います。

Q:東京ではどのような活動やイベントに参加していましたか？

卒業するタイミングで、仲間に出会って、自分のために何かを作るといふより、社会に向けて何かを作りたいという思いがありました。コロナの時期で、東京の駅が冷たい印象だったんです。みんなマスクをして、下向いて、携帯触って結構殺伐としてたんですよ。この状況をどうやって変えてくか考えて、アートを駅や電車の中にどんどん設置してこうっていうと持ち掛けた



Q:アーティストの道を選んだ時に不安などはありましたか？

なかったですね。自分でできることが絵を描くことしかなくて、他にできることがないので、逆に自信にもなってるって感じですね。自分が本当に自信が持てるものを見つけたからこそ、不安がないって感じだったと思います。

Q:高校生へメッセージをお願いします。

これから将来のことや決めなければいけないことが

学校を飛び出して、
地元で活躍するオトナを取材しよう！

伝統を守るために、 今自分ができることを

瑞草園
専務取締役
五十川庸司さん



道の駅池田温泉に直営店を出店し、お茶をより身近なものにしよう日々努力している瑞草園さんは、創業明治十四年の歴史あるお茶問屋です。専務取締役の五十川庸司さんに、新しい挑戦をした理由や今後の目標を伺いました。

Q:歴史のある家業を受け継ごうと思った理由、決める手は何ですか？

高校の時は一日でも早く家を出たいと思っていましたね。だから大人になったら家を出たし、今とは全然違うことをしていましたよ。

でも、大人になって自分も親も年を重ねていく、その親の姿を見て、なんだかほっとけないと思ったし、それで自分も大きくなったんだなって再確認する感じで、そんなこともあって、家業の「お茶」っていうものについて一回勉強してみることにしたら、のめり込んだって感じですね。

Q:どんなところにのめり込んだのですか？

お茶に限らず農作物はそれぞれ年、収穫時期、収穫



する人によって味が変わるから、それをどうブレンドして、おいしくお客さんにお届けするかとか。商品は一つ一つに決まった味があって、それはいくつかの原料をブレンドして作っている事とか。それが魅力であり楽しみとも言えますね。

Q:明治十四年の創業当時から変わっていないところや変わったところはありますか？

初代が一番大事にしていたのはお茶の品質だったので、それは今も変わらず品質重視でこだわり続けていますね。正直、商品がおいしくなければ売れないし長く続かないんですよ。短い間なら別の方法もあるけれど、五十年、百年と長年にわたって続けることを見越したら、どうしても品質は外せないところですね。変わったところは、昔は山吹色で渋いお茶が当たり前だったけど、今は甘みがあって、旨味があって、色も鮮やかな緑色のものの方が好かれているところですね。このような変化にどんどん対応し、追求していかなければならないところが楽しさ半分苦しさ半分って感じに思っていますね。

Q:今回五十川さんの代に直営店を出したきっかけは何ですか？

まず、道の駅ができることでテナントが募集されたんですけど、池田町はお茶の町ってうたってた状態にお茶屋さんが一軒も手を挙げないっていう状況で、それはあまりにも……って思って、お店を出したんですよ。

Q:大変だったこと、工夫したことはありますか？

昨今は簡単に飲めるペットボトルが主流で茶葉っていう商品がなかなか売れないように売れていかないので、じゃあ茶葉が売れないならドリンクとして売ろう。だから、今好きなことがあるならそれを深めていって知識を増やしてほしいと思います。年月が経って自分のものになって、それが非常に尊いものになる。積み重ねる年月以上に尊いものはないと思っています。だから、日々ちよつとずついいから好きなことの知識を深めていってほしい。でも、大学からでも十分間に合うから焦らなくてもいいと思うよ。



【感想】

今回インタビューを行って、私は長く続いている伝統を守ることの大切さや、守っていくためにその時代に合わせた商品を作ったり、取捨選択をしたりしていくことの大変さを学ぶことができました。

また、お茶の販売があまりよくない現状を見て、少しでも多くのお茶を売るために店舗を出していきたくて、という目標を聞いて、自分のできることを精一杯やろうとする志の強さに感激しました。

私は今まで目の前のことで精一杯で未来のことを見通せなかったけれど、これからはよりよい未来を過ごすために、日々新しい挑戦をし続けたり、昔のことに囚われ続けることなく今の時代に合ったやり方を選択したりしていきたいと思いました。

【取材記事】一年 天野伶菜

Q:良かったことは何ですか？

研究していくうえで様々なお茶の可能性っていうのが広がったことや、道の駅にあるってことで宣伝にもなることですね。あとは岐阜県のいろんな飲食店さんから使わせてほしいと声かけがあった事とかも、販路拡大に繋がったって感じですよ。

Q:今後の目標は何ですか？

生産者さんのためにはもう一頑張りが必要だと思っています。

池田町には本当に沢山のお茶があるけど、全部を抱え込めないのが現状なんですよ。

だから、この店があることによって少しでも多くのお茶を流通させていけたら一番いいですね。池田町全



部のお茶を売りさばくためにはあと百店舗くらいはいる。今は百分の一ぐらいの貢献しかできてないから、それが百分の二とか百分の三になって、一割ぐらいつと行くのが目標ですね。

Q:近年増えている放置された茶畑を減らすにはどうしてあげばいいと考えていますか？

先ずはお茶の消費量を増やすことが大切だと思います。昔はお茶が今よりも沢山飲まれていたから、市場でも沢山売られていたけど、ペットボトルのお茶が出て来たら家の中でお茶を淹れて飲むことが減ってきたんですよ。だから売れなくなって、収入が得られないから作る人が減って、茶畑の質が悪くなって、さらに売れなくなって……って悪循環に陥っているんですよ。

今お茶を作っている人っていうのはやる気のある人が大半だと思うので、その人たちが面倒を見られる分だけ茶畑を残して品質を上げていくのがこれからのやり方だと思います。もしくは茶摘み体験ができるような観光農園にするとかですかね。

Q:五十川さんのこだわりのあるお茶の淹れ方は何ですか？

家庭内で使われるほうが嬉しいので、一人一人が自分の好きなように淹れてくれて構わないですね。そっちの方が大事だし。ただ、渋いのが好きだったら熱いお湯でさっと淹れる、苦手だったらぬるま湯でじっくり淹れるってやった方がよりおいしいお茶が淹れられるの、いいと思います。

Q:高校生の私たちに何かメッセージはありますか？

十代の頃は可能性が無敵なんだよね。今日から何かを始めても、五年後に何かを始めても、十分間に合

学校を飛び出して、
地元で活躍するオトナを取材しよう！

挑戦は 何歳からでもいい！

瑞草園
専務取締役
五十川庸司さん



池田町のお茶の発展に尽力している創業約百五十年の瑞草園 専務取締役の五十川庸司さん。道の駅池田温泉にドリンクとしてお茶を提供するなど新たな挑戦をしている五十川さんの思いやこれからの夢をお聞きしました。

Q:創業当時から続く会社の理念はなんですか？

初代から一番大事にしているのはやっぱり品質ですね。今も変わらず品質重視第一でやっています。やっぱり物がおいしくなければ売れないし長く続かない。その時だけ売ればいいならまた違う方法もあるけれど、五十年百年続いてきたものを受け継いで、更に五十年百年続けていくことを考えると、どうしても品質が外せないですね。

Q:創業当時と今でお客様のニーズに変化はありましたか？

昔のお茶は渋いのが当たり前だったけど、今は全く逆で甘みがあつてうまみがあつて色も鮮やかな緑色の



「これやろう」って思うときはやっぱり突然来ますね。そのためには日々の知識の蓄積が必ず必要です。好きなことを調べるのとはかく体に吸収して頭の中に一日ちよつとずつでいいので入れていくと一年たつと三百六十個になる、十年たつと十倍になる。今五十歳くらいになってそのぐらいの知識は持ってないといけないのでね、それが年を重ねることかなってこの年になって感じていきます。

Q:お茶離れしている現代の人たちに対して業界を活気づけていくために何が必要ですか？

若い方たちに日常的にお茶を淹れて飲んでいただく必要がありますね。

一番茶、二番茶、秋番茶があつて、ペットボトルって二番茶と秋番茶で作るので、ペットボトルが売れるほど、一番茶が売れなくなって疲弊していきんですよ。実は、生産者さんの収入って一番茶が八割なんですよ。

今までは家庭でお茶を淹れる習慣が伝わってきたんだけど、今は核家族化しているので図式が壊れていっているんですよ。ペットボトルがでてよけいにお茶が売れなくなると生産者は費用を惜しみ、品質が下がり、値が下がる訳ですよ。この悪循環に今陥っているんですよ。

「お茶しよっか。」って言ったときに、コーヒーとか紅茶とかじゃなくて本当にお茶を飲んでくれる世の中にしていききたいですね。

だから、本来のお茶を飲んでいただく機会を作るのが、お茶業界の人間としての務めですね。

Q:高校生へのメッセージをお願いします。

十代の頃って可能性が無限大なんです。別に今日から何か始めようとしても全然間に合うし、五年後に何か始めようと思つても十分間に合うんです。だけ

お茶が好まれていきます。その辺をどんどん追求していかなきゃいけないっていうところは、やっぱり楽しみ半分苦しみ半分っていうところですね。

Q:道の駅でお店を出したねらいはなんですか？

道の駅ができるということでテナントの募集があつたとき、池田町は「お茶の町」つううたっているんだけど、お茶屋さんが一店も手を挙げなかつたんです。それはあまりにもってことで「じゃあうちがやろうか」と思ったのがきっかけですね。

昨今はお茶っ葉っていう商品がなかなか思つたように売れていかない。というのも、手軽に飲めるペットボトルが主流になってきたことによつて、お茶離れしているんですよ。お茶っ葉っていうのは急須に入れて、お湯を入れ、あと洗って片付けなければいけない。そうなるお茶葉は敬遠されていく。じゃあ、茶葉が売れないならドリンクとして売ろうかなって思つたんです。

Q:お店を出すという挑戦をしてよかったことはありますか？

研究したことでお茶の可能性が広がつたし、道の駅に置くことで宣伝にもなり、販路拡大にも繋がりました。あとは、生産者さんのためになるならもうひと頑張り必要かなって思いますね。

Q:今後の活動の予定や挑戦していきたいことはありますか？

池田町で生産されるお茶を全部うちで抱え込むことは現状できないんですけど、ある程度の量をこの店で扱うことによつて、そこを流通させていきたいです。池田町の全部のお茶を売りさばくには百店舗くらい必要ですね。今は百分の一くらいしかできていないので一割にできるようにすることが今後の目標ですね。

ど今何か好きなことがあるんだつたらその知識をどんどんつけて欲しいですね。やっぱり積み重ねる年月以上に尊いものはないですね。



【感想】

私は五十川さんとのインタビューを通して、長年続く家業を引き継ぐ難しさと今後続けていくために絶えず挑戦していく必要があることを学びました。

初代からの思いを受け継ぎ、クオリティを落とさず、さらにお茶離れしている若者のニーズに合わせてお茶の魅力を知ってもらわなければいけない。そんな時にお店を出すという決断ができたのは、明確な目標と日々お茶と向き合い知識をつけてきたからこそだと思います。

今、私には夢はあるけれどまだまだ知識と勇気が足りず自分の夢に大きな不安を抱えています。目標を明確にし、毎日の学習で知識を増やしていくことで少しずつ夢に近づき、いろいろな活動に参加して培われた経験を生かしていけるようにこれからも挑戦していきたいなと思います。

【取材・記事】 一年 岩田悠花

Q:新商品の『お茶×クリームソーダ』はどんなことからインスピレーションを受けましたか？

新聞とかテレビとか雑誌とかラジオとかそういったメディアを見て、「あっ、こんなものが流行ってるんだ」ところからですね。ただ、基礎知識としてまずお茶の知識がないと商品化に繋げることはできませんからね。砂糖や塩を加えるような味になるのか想像できる知識がないといけないし、テレビで喫茶店の商品の紹介を見たら、「うちもこうやって作つたらおいしくなるな」という組み合わせが頭でパッと考えられるかどうかも大事です。

ただ、実際やってみても「まずっ」ってなることは何回もありますね。そこから微調整して、作っていくって感じですよ。



学校を飛び出して、
地元で活躍するオトナを取材しよう！

新しい発想から 岐阜県の未来へ

野々山智則さん



野々山智則さんは会社に勤めながら、池田町でこだわりを持ってワイン用のブドウ栽培をしています。池田町の気温や気候に合わせたブドウの品種を選び栽培しています。なぜブドウ栽培を始めようと思ったのかをお伺いしました。

Q:なぜワイン用のブドウを作ろうと思ったのですか？
今、僕は普通に会社に勤めていて、家族が三人います。よく聞くのは定年を迎えて年金を受給し、余生を全うする、定年後はそんな人生が待っているというこ

とです。

ふと、「このままで家族を幸せにできる人生を送れるのかな」という疑問を抱いたのです。だから、本や映像などから情報収集をしている学んでいるうちに、会社に勤めることだけに依存するのではなく、

自分自身で生活できるくらい自立したものを作っていないといけないかと考えました。それで、いわゆるブドウ栽培をしたいと思って事業を起こしました。

Q:やりたいことがあっても行動できない人が多いと思いますが、野々山さんが行動に移せたきっかけはありますか？

二十歳三十歳になってくると、時間があつという間に過ぎるんですよ。気がついたら今、四十五歳で、あと十五年たつと六十歳になって、まばたきしているうちに六十歳まで来ちゃうんですよ。

やっぱり、家族を幸せにしてあげたいじゃないですか。どっか遊びに行ったり、人生を豊かにしたりするためには、現実を言っちゃうと、やっぱりお金って大事なんです。そう思うと「覚悟」が重要なんです。そうなるとおのずと行動に出ます。

本当に自分の中で「覚悟」を決めてやったことなら、気持ちも苦じゃないです。

Q:池田町でブドウ畑をしようと思ったのはなぜですか？

池田山は傾斜が適度についていて、また景色もいかなと思っただけですよ。

濃尾平野がさーっと広がって、こういうところがまた新しく果樹栽培をすると、雰囲気も良くていいかなと思っただけですよ。

あと、日頃は全然関係ない会社に勤めていて、その会社が揖斐川町にあるんですが、ちょうど通勤の途中なんです。朝早く来て、時間になったら会社に出勤して、帰りもまた寄って行ってっていう感じで、巡り合わせがあつて、池田町で始めようと思いました。

そういう気持ちで学校に来て楽しんで、いろんなことを経験してやっていると、自然と自分を引き出してくれるので、将来の就職とか社会に出たときも困らないと思います。



【感想】

野々山さんのお話を聞いて家族を幸せにしたいという気持ちと、岐阜県の産業に貢献できるようにしたいという気持ちで、ワイン用のブドウ栽培をしようと思ったのが本当にすごいと思いました。

毎日朝早くに起きて、ブドウ畑を見てから仕事に行くっていうのに、家族のためなら苦じゃないとおっしゃっていたのがすごいと思いました。

また、今習っていることが使われないと思ってても、大人になってから急に使うことがあることを知ったし、使い方次第ということも分かったので、学んでいる理由を見つけて勉強できるようにしたいと思いました。その他にも、よく学んでよく遊んで、いろいろな経験をすると自分の引き出しが広がり、将来の就職や社会で困らないとおっしゃっていたのでこの経験を生かして頑張っていきたいと思いました。

Q:なぜたくさんフルーツがある中でブドウにしたのですか？

一回自分の人生を棚卸したんですよ。よく商売の人がやっているんですけど、今お店の中にどういう品物が何個あって、全部整理すると、どういうのがあつてっていうことですね。それを自分の中で置き換えるんですよ。自分という意識の中に、興味を持ったことは何だったかというのを考えた時にあつたのがブドウの作業だったんですよ。

ブドウの作業、実は僕二十代のときもちよつとやっていました。きっかけが、ワインが好きなのでよくワインを飲むんですけど、長野県の塩尻っていう所に旅行で行ったときに、すごく綺麗なブドウ畑の前でワインを試飲できる所があつて、ブドウ畑を見ながらワインを味わうっていうのに感動してですね。あと、ワイナリーの玄関前に見学用みたいな感じで、ブドウの木が輪のように綺麗ならんでいたり、エントランスが房になっていたりして、それを見て、「おお、かっこいいな」と思ったんですよ。

それで家でもやってみようと思って、すぐに、インターネットとか、ホームセンターとか行って、早速注文



して植えたのが始まりですね。じゃあなんで今もやっているかと言いますと、岐阜県って日本酒がいっぱいあるんですよ。日本酒の蔵はいっぱいあるんですけど、ワインを作っているワイナリーって、全然なくて、だからこの岐阜県っていう所でやっていくときに、新しい産業や、お土産など、頑張れる余地があるんじゃないかと思つて、ワイン作ってみようと思っただけですね。

あとは、何より自分が好きだからです。自分で作ったものは美味しいじゃないですか。

Q:高校生に向けてメッセージをもらえますか？

自分の中の引き出しに詰めるものっていうのをとにかく増やしておこう。

人生は本当に選択の連続なんです。大学行こうとしたって、いろんな科があります。どんだんどん自分の目指すべき道っていうのが決まっていくわけですけど、今こういうことやりたい、なりたいて考えていて勉強をたくさんし、また変わってしまったって全然いいんですよ。その先ね、とんでもない出会いが待っている場合があるので、この引き出しの中をとにかくいろいろ広げてください。

今飽きたからやめちゃったことでも大人になってから急にハマリだすこともあります。

また、学校の授業をきちんとやる意味を自分で見つけていくと少しは変わっていくと思うし、絶対こんなやつでも将来役立つんじゃないって言うこともあるかもしれないけど、それをどのように生かすかどうかだと思います。

いろんな人がやっている授業っていうのも、絶対何かに役立つからやっていることなんで。数学なり英語なり、なぜ、学んでいるのかっていう自分の理由を見つけて、授業を受けると本当に勉強する意味って変わってくると思います。

学校を飛び出して、
地元で活躍するオトナを取材しよう！

池田町に適した ワイン用ぶどうを 育てたい！

野々山智則さん



どう畑に屋根を張って雨からぶどうを守っています。この畑でも、レインプロテクションの設置や、ぶどうだけを守るような房への傘掛けをして、ぶどうが雨で病気になるようにしています。

一つぶどうが悪くなるとほかのぶどうにも影響が出てしまうので毎朝チェックしています。

また、ぶどう畑の維持には草刈りや草むしりが大変で時期の三分の一は草刈りです。多くの時間と労力が必要です。除草剤を使用することで楽にすることができると、除草剤は土を固くしてしまいます。それに畑を豊かにするために必要な生物もいなくなってしまうというデメリットもあります。

そこで、草をそのまま生かし、土壌を柔らかく保ちながら有機的な栄養循環を促進する「草生栽培」という方法を使っています。この栽培方法では、土の中に色々な生物が生息し、土壌の健康を維持し、自然の堆肥を作り出しています。

Q:ぶどう農家という仕事を今後どのようにしていきたいと考えていますか？

今は自分でワインを作っていないけれどこれから



サラリーマンをしながらぶどう栽培をしている野々山智則さんにぶどう栽培に携わろうと思った理由などについて伺いました。

Q:サラリーマンをしているのになぜ新しいことを始めたんですか？

今の世の中は、将来が不安になることがたくさんあります。「このままサラリーマンとしてやっていて、家族と幸せな人生を送れるのかな」と疑問を抱きました。「自分自身で生活できるくらい自立できるものを作りたい」という風に考えました。また定年の六十歳になって始めては何も出来ないと思い、サラリーマンをしながら準備をしていこうと思いました。定年後もそのまま数年勤めていく人もいますが、私は定年になったら、自分のことをやりたいという強い気持ちがあったので起業を選びました。

池田山は傾斜が続いていて景色がいいです。また親戚が昔はお茶の栽培をしていましたが今は荒れた状態



作っていききたいと思います。

またもつと手広く何か大きく町の産業に貢献できるようになりたいというの大きな目標です。貢献をする中で流行りのキッチンカーなどを使いお祭りをして他の県からお客さんを迎えたいと考えています。

お茶やブルーベリーなどが池田町では有名なので、ぶどうとは違う商品を作ったり食品に関して総合的に色々やりたいという気持ちがあります。

Q:高校生に向けてメッセージをお願いします。

若いうちに興味を持ったことにはどんどん手を出して、自分の引き出しを増やしてほしいです。

学校生活や将来の選択では、さまざまな道がある中で自分の進むべき道を見つけることが大切です。今興味があることが数年後には変わるかもしれませんが、どんな経験も将来役に立つことがあります。

自分が学んでいることや経験が、思いがけない形で役立つこともあるので、さまざまなことに挑戦してみてください。

数学や英語などの勉強も、一見役立たないように思えるかもしれませんが、論理的思考や問題解決能力を養うために重要です。

例えば数学ではルート三角関数でXYZの位置を求めるときに今ではAIがしてくれるかもしれませんが0.001ミリずらすなどの時に人間の数学の知識が必要になってきます。このようにAIが出来ないことには人間の知識が必要になります。将来の職業や社会生活で必ず役立つスキルとなります。

学校で学ぶことの意味を自分で考えながら、学びを深めてほしいです。

態の耕作放棄地を持っていました。新しく果樹栽培をするとう町の雰囲気良くなるかと考え、親戚に畑を借り、自分で整備してこの池田町でワイン用ぶどうの栽培を始めました。

Q:何種類のぶどうを育てていますか？

計五種類のぶどうを育てています。

白ブドウではモンドブリエ、アルバリーニョ、プティマンサンの三種類、赤ぶどうでは、ビジュノワール、アルモノワールの二種類を育てています。

Q:なぜ多くの種類のぶどうを育てているんですか？

この畑ではヨーロッパ系のワイン用ぶどう品種を植えています。食用のぶどうとワイン用のぶどうは、遺伝的に異なっています。ヨーロッパのワイン用ぶどうは、地中海性気候に適しており、日本の四季がある気候とは異なるため、日本での栽培には課題があります。昼夜の寒暖差、梅雨の存在、湿度などの違いが影響します。

そこで、さまざまな品種を試験的に植え、どの品種がこの地域の環境に適応し、良質のワインを作るのに適しているかを見極めていきます。結果によっては、色づきが悪い品種や酸味が強い品種もあり、適応しないものもありますが、試験栽培を通じて最適な品種を探しています。

Q:ぶどう農家をされていて大変なことはなんですか？

自然を相手しているので突然台風が来たりして雨でぶどうが病気になるので自然を相手にすることは大変です。

ぶどうは非常に病気に弱く、特に雨に濡れると病気になりやすいため、岐阜市の長良川沿いなどでは、ぶ



【感想】

ぶどう農家の野々山さんの話を聞いてまず感じたのはその仕事の大変さです。野々山さんは、一年を通じて多くの作業を計画的に行い、ぶどうの品質を高めるために日々努力していることがわかりました。

特に印象的だったのは、畑や土の管理に除草剤を使わずで行っていることです。生えている草に除草剤を使うと土が硬くなって根が張らなくなってしまうので、いってほしい虫まで殺してしまったりするので長い期間手で作業していると聞いてとても大変だと思いました。さらに、ぶどうの管理の大変さも知ることができました。一つはぶどうが悪くなると他のぶどうにも影響が出る可能性があります。そのため、野々山さんは毎日ぶどうの状態をチェックしていて、とても時間と労力を使いますが、それでも一つ一つを大切にしようとしているということが感じられました。最後に、ぶどう作りの大変さと、農家さんの思いを改めて感じました。また野々山さんは始めたきっかけが趣味でぶどう栽培を少しやっていたという経験から始めていて、私も社会人になる前に多くの経験を積んでいて野々山さんのように将来に役に立てるようにしたいです。